



2つの世界遺産を結ぶ、夏遠足

～宮島の海から広島川の川を上って平和の意味を考える～

広島なぎさ中学校・高等学校
教諭 染井 真吾



聞き慣れない言葉「夏遠足」

遠足といえば、多くの人は、新緑や紅葉が美しい行楽シーズンに行われるものだと思っているでしょう。

遠足は、学習指導要領では、「平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、よりよい人間関係を築くなどの集団生活の在り方や公衆道徳などについての体験を積むことができるようにすること(第5章特別活動第[学校行事])」と明記されています。つまり、遠足とは、教室では得がたい体験を通じた貴重な学習の機会であり、いわゆる物見遊山や観光旅行に終わらせることのないように創意工夫して実施すべきものなのです。

広島なぎさ中学校・高等学校は、そうした遠足のねらいを十分に踏まえ、中学2年以上の学年では、三次市(風土記の丘)、宮島(弥山)、呉市豊町(御手洗重要伝統的建造物群)、浜田市(海洋館)、尾道市(千光寺)などに出かけていますが、これらは気候のよい4月に一斉に実施しています。けれども、中学1年の遠足だけは、「夏遠足」と銘打って毎年7月に実施する特別な遠足なのです。

8月6日を意識させる

「夏遠足」は、一年で暑さが最も厳しく感じられる「大暑」の頃に計画されます。平成29年は7月26日から28日にかけて1クラス(約36名)ごとに実施されました。「なぎさ」という校名に因み、海から川へ、水を伝っていきながら平和について考える学習です。出発点

は宮島、最終目的地は平和記念公園です。8月6日を意識できること、また潮位などの条件も考慮して日程が決められました。



8時15分を忘れない

宮島口の集合時間は、原爆投下の8時15分を意識しました。

宮島に渡ると、まず大雁木や大鳥居を見学し、厳島神社の昇殿口を横目に神馬舎の傍らの階段を上りました。たどり着いたのは厳島神社末社の豊国神社(千畳閣)です。そこでは、宮島歴史民俗資料館主事(学芸員)の東口茉佑子さんが迎えてくれました。出前授業の講師をお願いしていたからです。

東口さんは、写真を示しながら史実に基づく宮島の歴史を、生徒たちにわかりやすく話してくれました。世界文化遺産に登録されて21年になる厳島神社は、本社本殿や回廊が特に有名ですが、それだけではなく幣殿、拝殿など17棟とその周辺にある大鳥居、五重塔などの建造物群からなる広大な世界遺産なのです。

どこからともなく吹いてくる風と、裸足で歩く千畳閣の木の床のひんやりとした感触に、ひとときの涼を感じながら話に聞き入ります。

今周囲に響き渡っている蝉の大合唱が、8月6日のあの時間、ピタリと止まりました。爆音と激しい振動。人々は当時宮島の包が浦にあった弾薬庫が爆発したのかと思ったそうです。栈橋に到着した連絡船の乗客は、口々に熱い、熱いと訴えていたといいます。

杓文字と千畳閣

千畳閣は、天正15(1587)年豊臣秀吉公により建立が命ぜられました。梁には、経典や絵馬らしき奉納品が目立ちます。これは、江戸時代以降宮島を訪れた能や芝居の一座が残したものだそうです。片隅には大杓文字も立てかけられています。ふと傍らに目をやると両手を回しても届きそうにもない大きな柱に、無数の小さな穴があいていました。「何だろう?」と不思議に思う生徒たちに、東口さんは1枚の写真を見せてくれました。



1枚の写真が語る宮島の過去

そこには、日清・日露戦争に出征する兵士たちが打ち付けた杓文字が柱を埋めんばかりに写っていました。柱の穴はその杓文字を打ち付けた釘の跡だったのです。兵士たちは、どんな思いで杓文字を打ち付けたのでしょうか。杓文字なので「敵を召し取れ」の

縁起担ぎとも取れますが、千畳閣は元々秀吉公が、戦で命を落とした兵のために建てた経堂です。それを考えたとき、杓文字には戦地へ赴く兵士たちの決死の覚悟と残される家族への思いが込められているように思えました。

千畳閣で折り鶴

短い時間でしたが、歴史的な建物の中で、当時の人々の営みを知ること、平和の大切さを意識する貴重な体験となりました。そして、生徒は、机も椅子もない千畳閣の広い床の上で鶴を折りました。ただひたすら平和を誓い、かつてこの場所にいたであろう兵士にも思いを馳せながら、心を込めて折ったのです。

完成した一羽一羽はそれぞれが大切に鞆にしまい、宮島市民センターに運びました。そこで、クラスごとに刺繍糸に繋ぎ、各クラス180羽の鶴の束を作りました。それを6クラス束ね「千羽鶴」にして、最終訪問地である平和公園の原爆の子の像に供えるのです。

世界遺産航路で川を上る

宮島から平和記念公園へは高速船で移動します。この船は、2つの場所を最短時間で結ぶため「世界遺産航路」の別名を持っています。水しぶきを上げながら進む船は、広島湾から本川(クラスによっては元安川)へと溯り、いくつもの橋をくぐって、私たちに日常では味わえない、「水の都広島」らしい景色を提供してくれます。けれども、生徒たちには今のこの美しい景色を目に焼き付けるだけでなく、あの日、

この川でどんなことが起こっていたのかを考えてほしい。そのために、今年には船内で宮島の島民が経験した被爆体験を朗読する会を試みました。

朗読するのは生徒です。事前に朗読ボランティアを募り、放送室で練習や録音を繰り返して、音声データに記録しました。そして、高速船の船内放送に組んでいただく許可をとり、同乗するお客様にも同意をいただいた上で朗読会を実施しました。

高速船に乗り込むと、最初はジェットコースターのような乗り心地に興奮気味の生徒たちでしたが、朗読が始まると自然と落ち着いて聞き入っていました。穏やかな川面を進みながら、それとは真反対の非日常の原爆の光景を想像していたことでしょうか。そして、元安栈橋に到着し、抜けるような青空の下に佇む原爆ドームを間近に見上げたとき、想像を絶する悲惨さと、それでも諦めることなく復興へと力を注いだ人々のことを深く考えたに違いありません。

広島「意志」を世界へ

上陸後は、まず国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れ、被爆の実相や被爆体験者の手記を学びました。被爆者の高齢化が進んだ今、求められているのは、被爆体験伝承者の養成です。証言者の体験や平和への思いをしっかりと受け継ぎ、後世に正しく伝えていくことが私たちにとって大切な課題となっています。祈念館での学びは、生徒たちにとって、これから出会うであろう県外や海外の友に「ひろしま」の意志を発信するための第一歩となりました。

過ちは 繰返させぬから

今年、72回目の式典を迎える原爆死没者慰霊碑前では、テントの設営が急ピッチで進められていました。

クラスごとに黙とうをささげた後、担任から埴輪型の屋根の由来や慰霊碑に奉納されている原爆死没者名簿のこと、さらには石碑に刻まれた誓いの言葉の意味が語られました。

原爆の子の像

慰霊碑参拝の後、「原爆の子の像」を訪ねました。被爆後白血病になり、回復を祈って折り鶴を折り続けた純真な心が、世界中の感動を呼んだ佐々木貞子さんの碑です。宮島で作った「千羽鶴」を献納しました。これが「ほくらの叫び、私たちの祈り、世界に平和を築くための第一歩だ」という思いを込めて。



世界に平和を築くための第一歩

最後に相生橋を渡り、原爆ドーム前に立ちました。生徒たちは、熱線や衝撃のすごさの跡を目の当たりにしながら、復興の象徴として世界文化遺産に登録され、世界に平和を訴え続けるドームの意味を心に刻んで平和公園を後にしました。